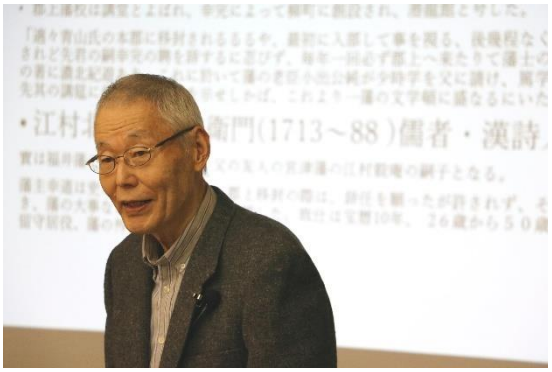
第４４回「はちしん灌花塾 ～郡上の歴史の補遺を学ぶ～ 」開催

１２月１６日(土)第４４回「はちしん灌花塾」が本店６階大会議室において開催されました。

地域史家高橋教雄先生をお招きして「郡上の藩校」と題して講義いただき、当日は当金庫の役職員や一般参加の方４０名が受講しました。



＜藩校の設立　潛龍館＞

郡上の藩校は講堂と呼ばれ、郡上藩青山氏２代幸完（１７７５～）によって柳町（現備前屋）に創設された。池に潛んだ龍が飛び立つという意から「潛龍館」と号し、教授に江村北海（儒者・漢詩人）を招聘した。北海は毎年郡上で講義し、紀行文『濃北紀遊』を著した。

＜江戸時代の八幡城絵図＞

漢詩集『濃北風雅』（１７８２年著）の挿画では、八幡城を「虞城」「積翠城」とするなど、郡上の自然風景を漢文的に表現している。『濃北風雅』には郡上藩士の詩作１３０首が収められている。

＜海保青陵（１７５５～１８１７）経世家・思想家＞

海保青陵は宮津藩家老角田青渓の長子である。父青渓は藩の財政改革を図ったが内紛により隠居させられた後、尾張藩に出仕した。青陵は徂徠学と蘭学医桂川甫三から西洋的な合理主義を学び、安永５（１７７６）年に青山氏の儒官となった。その後退官して各地を遊学し、加賀藩の財政改革や大商人に経世策を説くなど、実証的・機能的な経世学を樹立した。代表著書に『稽古談』がある。

＜江村北海　伝左衛門（１７１３～１７８８）儒者・漢詩人＞

北海は宮津藩士江村穀庵の嗣氏である。藩主青山幸道は北海の吏才を認め京都の留守居役として外交や経済を任せるなど重用した。郡上藩移封の際は辞任を願ったが許されず、郡上の潛龍館で儒学を教授した。宝暦１３（１７６３）年に退官し京都に住んだ。漢学入門書『授業編』には、“２４年間ひたすら俗吏として勤め、詩文の修行は廃棄していた”と述懐している。

宝暦１２（１７６２）年に刊行した『虫諫』は虫の長を決める内容で、表面的には北海とおぼしき人物が各虫の長所、短所を述べる寓話の形式であるが、人間の愚かさ、邪心、

欲心を諫め、特に長となった蟋蟀の話は上に立つ者の姿勢を正す寓意であり、藩主幸道にあてたものと思われる。

＜青陵の記す宮津藩財政改革＞

青陵が文化１０（１８１０）年に刊行した『稽古談』には、宮津藩は財政が逼迫し、収納米を江戸へ送らず在府の藩士は困窮していた。一方藩主青山幸道は癇症で病気と称して遊興に耽っていたことから、本家青山氏（丹波篠山藩）が角田青渓と小出公純を家老に任じて財政改革を始めたが、内紛により二人は隠居させられたとある。この財政改革失敗が財務官であった北海と青渓の子である青陵の生き方に大きな影響を与えた。

＜北海没後の潜龍館＞

北海没（１７８８年）後、藩主幸寛（１８１６～）が京都の儒者杉岡噸桑を儒医として招聘した。噸桑は襄荷渓房（現三原屋付近）に住み、講堂で経書を講義した。噸桑没後、継嗣の良策が儒医、内外科医として仕官し医学も併修した。漢詩集『襄荷渓詩集』をまとめ、文政８（１８２５）年に退官した。

＜文武館の設立＞

藩主幸哉（１８３８～）は江戸藩邸に講堂を設立し、安政５（１８５８）年に『西洋度量衡』を発刊した。江戸の講堂では藩士山脇正準（軍学者・兵学者）が開港論や西洋の兵学を講義した。正準はその後、幕府に抜擢され軍の西洋化に関わり、明治維新後は兵部省に出仕した。

幸哉は慶応元（１８６５）年に藩校「文武館」を殿町（現マルコ金物周辺）に設立した。

＜文武館の教育＞

文武館の教授として村瀬籐城、入山謙受、山田翠雨を招聘し漢学に加え兵学と洋学を講義し、藩士子弟を強制的に入学させた。

教授科目は儒学、国学、兵学など多岐にわたり、とくに漢学では四書五経の素読から十八史略の講義に進み、講義解釈は口頭で質問論考によった。藩校には督学、大教授、小教授、寮長をおき、生徒定員はなかった。

＜集成館の設立＞

文武館は明治元（１８６８）年に正式に医学、洋学を加えた「集成館」として藩主幸宜の時代に再編された。これは農兵や民兵の必要から庶民にも門戸を開き、新たに算術、医学、洋学、天文学、音楽などを講義するためであった。

さらに集成館は明治３（１８７０）年に軍事兼学校として再編され、皇学、洋学、練兵、機械製造などを講義し常備隊文武校となった。督学は入山謙受、大助教は毛受、牧野、小助教は大槻、茂原、田中であった。

＜医学校の併設＞

同年６月から種痘施療を行う医学所が設けられ、７月に医学寮、９月に医学校と改称した。医学校の教授は１０名であった。

元来郡上藩の藩医は１３家あり、在国は７家（深井、水野、河野、楚、毛受、原）、江戸は６家（中泉、林、浅井、多和田、小野、長嶋）、町医者は３名（松野玄寿、松野玄伸、原環）で、医者は藩校の教授として勤めた。

＜幕末の藩校は人材養成機関であった＞

幕末の藩校は、新しい時代を担う人材育成と医療の充実を目的として、種々の恩典制度を設けて医学修行を奨励した。

医学生には湊宗有・忠英、林元伸、中泉松庵などがいた。

＜全国の藩校の現状と民間の教育機関＞

全国２７６藩のうち２１９藩に藩校があり、８５％が幕末までに設立されている。その中で郡上藩のように医療を中心とした広範な教育を優先させた藩校は非常に少なかった。

また、民間の教育機関としては手習い、寺子屋があったが、幕末の郡上では藩士たちや町民たちが塾を作り、藩士から一般庶民まで教育を広げていた。

藩校廃止（明治４年）から郡上初の小学校「桜義校」が殿町（現郡上八幡まちなみ交流館）に創設（明治６年）されるまで、入山謙受の私塾「灌花塾」（※当金庫講義塾名の由来）が郡上の教育を担った。

＜貢進生制度は明治３年に始まる＞

貢進生は明治３年に各藩からの推薦を受けて大学南校（東京大学の前身）に入学した生徒のことで、藩からは東京出府費、書物費、諸費、合計１４２両が支給された。この他に修学生には奨学金制度があった。

維新時の藩費遊学生には浅井意識、貢進生には毛受真一郎、林元策、小野三貞、長嶋隆安、修学生には山脇鏡八郎などがいた。

集成館の運営費用は医学校を含めて年間１，０３５両で、このうち遊学費用が２０％を占めていた。

＜まとめ＞

最後に先生は、「幕末から明治にかけて郡上藩には、藩校をはじめ多くの私塾があり教育を非常に大切にしていた。藩校では奨学制度を充実させ、医療や兵学など西洋の最先端の知識と技術を取り入れるなど、自分たちで新しい時代を担う人材を教育し、藩を発展させるという気概を持っていた。」と締めくくられました。